

方法としての境界,あるいは労働の多数化

サンドロ・メツァードラ* + ブレット・ニールソン**
(北川 眞也***訳)

Mezzadra, S. – Neilson, B. 2008, Border as Method, or, the Multiplication of Labor, in transversal 03 2008, eipcp (European institute for progressive cultural policies), <http://eipcp.net/transversal/0608/mezzadraneilson/en>

この論文は、私たちが現在行っているより大きな研究プロジェクトの概略として読まなければならない¹⁾。私たちの仕事の問題とするのは、今日の世界のなかで境界borderが増殖していることについて、そして現在進行する労働生活の再構築のなかで境界が果たしているマルチ・スケールな役割についてである。確かに「ボーダー・スタディーズborder studies」という研究分野は広がりを見せている。だが、私たちはセキュリティとアイデンティティに対する過度な関心を乗り越えることで、ある意味ではこの分野を作り直そうとしたいのである——より正確に言うならば、グローバル資本主義の非常に異質性にあふれた時間と空間のなかで境界が果たす決定的に重要な役割という観点から、これらの問題の分析の枠組みそのものを再び作り直そうとするということである。この枠組みのなかで、私たちはマルクスの労働力labor-powerという概念を再考し、「国際分業」という概念を批判的に議論する。だがそれに加えて、カルチュラル・スタディーズとポストコロニアル研究で翻訳translationという概念をめぐる展開されている議論に対しても影響を及ぼしたいと思っている。

1 方法としての境界

私たちにとって、境界とは単なる分析の対象ではない。たとえあらゆる境界に、そして境界上のあらゆる地点に付随している数々の経験的特徴を明記し分析する必要性を認めているとしてもである。むしろこの論文のタイトルが提起しているように、私たちにとって、境界とは方法 method なのである。これはその物質的な文脈から引き離すことができ、あらゆる経験的状况に全般的に適用できるような抽象的方法論を境界が提供するという意味ではない。方法とは、個々の物質的状况から現れてくるべきものとして私たちは理解している。境界の場合なら、こうした状況とは、緊張とコンフリクト、分割と連結、横断と妨害、生と死をめぐるものとなる。ゆえに、方法としての境界は、一連の戦略的概念の全体を、さらにはその概念の間で形成される関係性をも作り直せるような知的観点を必要とするだけではなく、次のような研究のプロセスもまた必要とする。それは、境界が1つの制度として、一連の社会的諸関係として、その双方として構成される際の多面的な闘

いや交渉、決して人種だけには限られない闘いや交渉に対して、たえず説明を与え反応を示すような研究のプロセスのことである。

私たちは次のことを確信している。それは、現在のグローバル化のプロセスが有する重要な特徴の1つとして、もはやその安定性を当然とは考えられない様々な地理的スケールが、途絶えることなく形を与えられては作り直されている状況があるということである。私たちは方法としての境界によって、この問題を取り扱い、様々な空間を横断しそこにおいて交差し、そして空間の概念をその構成においてますます異質性に満ちた複雑なものにする様々な種類のモビリティを理解しようとするのである。この複雑性のいくらかは、これらのモビリティを述べる際に用いられる概念としてのメタファーのなかにはっきりと表れている。グローバルなモビリティの新しい形態に関する批判的議論をほぼ独占してきたのが、フローという水力学的なメタファーであることは否定できないだろう。しかし、この概念の優越性は異議を差し挟まれてきた。なぜなら、数多くのエスノグラフィックかつ人類学的な仕事、他の概念

* ボローニャ大学

** ウェスタン・シドニー大学

*** 大阪市立大学 COE特別研究員

ツールや命名法によってこそよりうまく述べられるようなグローバルな連結のケースやパターンに焦点を当ててきたからである。

たとえば、インドネシアのカリマンタン島の広大な地域に及ぶ森林伐採に影響を与えそれを支えている密度の濃いグローバルな連結を述べるためにアナ・ツィンは、フローのメタファーをグローバルな経路を切り開くというメタファーに置き換えている（重要なのは、これらの連結がすでに存在する経路に沿ってというよりも、軍隊・暴力・企業を通して創出されているという点を強調することである）。同じように、サハラ以南のアフリカでの資源抽出についての仕事のなかでジェイムス・ファーガソンは、いかに諸々の移動が「ネットワークのなかの孤立した地点を、その間に横たわる数々の空間を（同じ効率で）排除しながら」効果的に連結しているのかを述べるために、フローという概念を用いるよりもむしろ、グローバルな「跳躍 hop」という概念を導入している。重要なことは、フローのメタファーを不適合なものとするのではなく、様々な種類のグローバルなモビリティを同定しはじめられるような分析のカテゴリーへと移動していくことである。それは、ただ1つのことにエスノグラフィーの焦点を当てるだけでは不可能なやり方でこそ実現できるものである。境界というのは、これらの異質なモビリティの把握を可能にする方法論的観点なのである。私たち自身の身を境界へ置くことで、まさしくグローバルな空間と時間の深遠な異質性の生産について述べることでできる境界の思考 border thinking (Mignolo 2000) を展開してみようと思う。

2 労働の多数化

現代の諸々のグローバルなプロセスについてのあらゆる思考の中心には、世界が資本と商品のフローに対してはより開かれるようになってきたが、人間の身体の流動に対してはより閉じられるようになってきたという事実がある。しかしながら、人間の身体からは切り離すことのできない種類の商品もある。今言及したこの一見逆説的な状況を理解し解明する鍵を提供するのが、まさしくこの商品の独自性なのである。私たちが心に留めているのは、労働力という商品である。労働力は人間の身体の能力を述べると同時に、多様な地理的スケールで構成される市場において売買される財としても存在している。労働

力が他のあらゆる商品とは違った商品であるというだけでなく、それが交換される市場もまた独特なものである。というのは、境界が労働市場を形作る際には非常に際立った役割を果たしているからである。境界で起こるふるいかけと差異化の数々の過程は、多様な空間のなかで、そして多様な空間にまたがって、労働力を形成することになるのである。しかし、労働力に内在する抽象的な商品形態の内には、独特の緊張が存在している。それは、労働力が生きた身体からは切り離すことができないという事実要因である。たとえば、机という商品の場合とは違って、労働力という商品形態とその「容れ物」、つまりは生きた身体との間の境界は、たえず振り返っては再確認されなければならないのである。これこそが、諸々の労働市場の政治的・法的構成には、権力が生を包囲するためのレジームの変転が必然的に伴うことになる理由である。それはたとえば主権と統治性との間のはっきりとした区別を複雑なものにする。そしてまたこれこそが、これらの市場内で出現する労働闘争という次元が、境界の問題と対決しなければならない理由でもあるのだ。

まさに労働力と闘争との間の関係こそが、数多のボーダースケープ borderscapes（この概念については、Rajaram - Grundy - Warr, eds. 2007 参照）において私たちが分析する境界の強化と境界の横断をめぐる数々の事例に関係をもたせるのである。これは、様々な主観的・客観的な状況のなかで、労働力・境界・政治的過程の間での一連の安定したあるいは直線的な関係を論じるということの意味しているのではない。実際のところ、次の概念を導入することによって、私たちはこれらの布置にもたらされる予測できない数々の変化を明らかにしようとしているのである。それは労働の多数化という概念である。この概念は一方では、労働過程が強化される模様や生の時間を植民地化する労働の趨勢を述べるものである。他方では、この概念は国際分業という非常によくなじみのある概念に関わるものであり、それを補強するものでもある。政治経済学のこの古典的概念をひっくり返すことで、私たちはとりわけ次のような正説に疑問を投げかけたいのである。それは、国際分業にしたがって、あるいは3つの世界のモデル、また中心/周辺、北/南といった二元論で作上げられた世界のモデルが有する安定した対形象化にしたがって、労働のグローバルな連続体を分割・分類している正説のことである。また、私たちは次のことも求める。それは、たとえ労働市場がどれほど限界付けられ、境界付けられているとして

も、諸々の労働市場の内部での労働の階層化について詳述する際のカテゴリーを再考することである。

労働の多数化という概念に賭けられているのは、グローバル資本の移行の現段階における空間の異質性との関係で、労働と権力との間の関係（したがって労働力を連結する古典的なあり様）を再考しようという試みである。もしこの移行の概念的かつ物質的座標として労働と空間とをみなし、そしてその2つは本来的に連関し合うものだというニコラス・デ・ジェノヴァ (De Genova 2008) のテーゼを受け入れるなら、この連関の性質は様々なシナリオのなかで変化するかもしれないと考えられるようになる。とりわけ、私たちは次のようなことに言及したい。グローバル空間の異質化には、一方での既存の国民国家の様々な地理の破裂と、他方での生産と労働の搾取の過程を容易にする予想外の連結のなかへと一見別々の領域や行為者たちを押し込んでしまう内破とがいかに伴っているのかということである。このことは、国際分業に関する古典的なイメージが乗り越えられていくような状況をもたらす。またさらには、1970年代後半にドイツの社会学者フレイベルたち (Froebel et al 1980) が「新国際分業」と呼んだものにも取って代わるものでもある。新国際分業には、多国籍企業が果たす役割の重要性が高まることにともなって、そして脱産業化と従属によって様々な効果をもたらされることにともなって、十分に発展した国からそれほど発展していない国へと物質的生産が移転するという意味が含まれていた。

国際分業という概念は、古典的な政治経済学の議論に由来する複雑な系譜を有している。ここでは、この概念が1920年代、1930年代以来、世界が一方では国民国家の境界によって、他方では中心と周辺の間での分離によって境界付けられた別々の労働市場へと分割される状況を述べるべく主として用いられてきたと言っておけば十分だろう。この点に関しては、ヤコブ・ヴァイナー (Veiner 1951) の著作がとりわけ重要である。国際分業の着想に疑問を呈することで私たちは、国家からなる国際システムの上に、今ではトランスナショナルかつグローバルな規模の様々なプロセスが重なっているという明白な論点を指摘したいのではない。単に形容詞としての「国際的」を「トランスナショナル」あるいは「グローバル」に置き換えるだけでは、理論的な移動としては全く十分ではない。そのような移動では、現在の移行のプロセス、そしてそれらが移住・労働・境界管理に有する意味合いを分析するための適当な概念

道具を引き出せないのである。

数多のトランスナショナルなプロセスは、いつだって存在してきたというのが現実である。過去数十年間におけるこれらのプロセスの増強具合について入念に調べようとする多くの努力は、分析上かつ説明上の有効性を有してはいる。だがその一方で、国民国家の存続、その亡霊のような存続あるいはそうではない存続を説明する必要性も引き続き存在している。国民国家が自らを新しいグローバルな組織形成の論理に据え付ける時機としての「転換点 tipping point」というサスキア・サッセンの着想 (Sassen 2006: 148ff) を受け入れようと、出現する〈帝国〉の「混合政体」の内部では、主権権力の独占者としての国民国家は立ち退かされるというハートとネグリの議論 (Hardt and Negri 2000: 304ff [2003: 390-412]) を受け入れようと、グローバル資本主義は様々な場所で特有の形態を引き受け、様々な独自の戦略と実践を採用しているということは認める必要がある。たとえば、中国へと広がりを見せる中でネオリベラリズムは、ヨーロッパや北アメリカの代表制民主主義の文脈で確立されたものとはかなり異なった特殊な形態をとっている (Wang 2003)。

境界の多数化は、この資本主義の複雑な差異化に関係するものであり、資本のヘゲモニーがもたらす空間節合のひとつのモデルを指し示すものである。しかし、それは国際分業の概念、そして中心-周辺モデルによって例証されたモデルとは非常に異なっている。もし労働力移動の管理のなかで、また生産と搾取の地理が形作られる現代的様式のなかで、中心と周辺のモデルが、分割を行う唯一の手段でもなくまた基礎的な手段でさえもないのならば、労働の組織化と搾取について記述するための概念としての分割が有する第一義的な重要性を再考し複雑化しなければならないだろう。まさしくこの意味においてこそ、私たちは労働の多数化について、境界の多数化を付随させる労働の多数化について語るのだ。多数化は分割を排除するわけではない、と書き留めておくのは重要であろう。ここで再度繰り返しておけば、私たちは諸々の概念を取り替えてしまうことを提案しているわけではない。実際のところ、多数化には分割が伴うものであるし、もっと強く言うならば、多数化とは分割の一形態であるとも言える。私たちは労働の多数化について語ることで、次のことを指摘したいのである。それは、国際分業の枠組みの中で構築された機能の仕方とは根本的に異なった方法で、分割が機能するということである。つま

り、分割は管理手段を止むことなく多数化させることを通して機能する傾向にあるのだ。そうした管理手段は、国際分業の様々なモデルのなかでは分離されたものとして構築される個々の空間の内部における労働のレジームの多数化やそのレジームが含意する様々な主体形成に応じて形作られるのである。ここから導き出される結論は、様々なグローバルかつローカルな空間をまたいで、それぞれ独自の種類の労働のレジームが存在しているということである。要するに、分業というのはそれ自体が内部で異質性を有している重なり合う空間の多数性のなかで考えられなければならないのである。

今ではもう明らかであるが、「国際分業」の概念に対する私たちの批判は、グローバル資本主義の「平滑」空間という考えを参照点とはしていない。むしろ、まさしく反対のことが本当である。現在の資本主義で知や金融のような「抽象的」権力がますます支配を増大させている趨勢は、数々の労働のレジームや場所が有する深い異質性に対応しているという事実を私たちは強調するのだ。境界の多数化は、この異質性を節合する際に重要な役割を果たしているし、それをより広大なグローバルな回路へと差し込むという点でも重要な役割を果たしている。連結と分割を行う諸々の要素が多数化することで、現代資本主義のマルチ・スケールからなる地理が生産されるのである。もちろん、この地理は富と権力の巨大な分割によって形作られる。しかし、この地理の複雑性は、「3つの世界」あるいは「グローバル・ノース」対「グローバル・サウス」のようなイメージにますます異議を唱えるようになるだけでなく、「国際分業」のような一貫性のあるイメージを表現するために、「中心」と「周辺」といった概念を頑に用いようとするあらゆる試みにもまた異議を唱えているのである。

私たちは研究のなかでこの境界の多数化についての数多くの例を分析する。それはアフリカから中国の国内の境界、EUの外的境界からアメリカ合衆国とメキシコの境界、オーストラリアの「パシフィック・ソリューション」からベンガル地方の境界地帯にまで及ぶ。そこで私たちは、移動する労働力の選別と管理の手段として機能するふるいがけと序列化をもたらす差異のレジームのありさまを明らかにする。このモビリティと境界の増殖にともって、資本主義下での労働の組織化が有する必然的特徴である分割と階層化は、前例のない強度と広がりを見せている。労働の多数化という概念を用いて仕事をするとは、このような分割を単に所与のものではな

く、いつも生産されるものとして、そしてしばしば移民の移動自体に対するリアクションとして、強いられてはまた再び強いられるものとして認識することなのである。ここにおいて、多数化の作用には、統治可能な側面と統治不可能な側面とが同時に存在していることになる。労働力が移動し忍び込んで隠れて、世界の様々な箇所において境界を横断してはそれを作り直しているが、またそのモビリティは服従化をもたらす現実的かつ暴力的な過程によって形作られてもいる。この服従化をもたらす数々の過程はますます、差異を通しての包摂、つまりは示差的包摂という相関関係をもつ過程を通して生じるようになってきているが、また遮断・減速・加速という時間性を通して生じるようになってきているのだ。

3 時間的境界の空間において

『グローバルな「ボディ・ショッピング」』という本の中で、シアン・ピャオはインドの労働システムについてのエスノグラフィックな説明を提供している。このシステムは、ボディ・ショッピングとして知られる複雑なシステムであるが、インドのIT労働者のトランスナショナルなモビリティを制御しているものである。このシステムに基づいて、インドからIT労働者をリクルートするために、世界中のコンサルタントが、様々な国へのかれらの移動経路を準備し、そして契約労働というかたちでかれらを顧客に貸し出すために仕事をしている。企業のニーズとホスト国における移民に関する法的布置との間を仲介することで、このトランスナショナルな労働システムは、移動する労働力を変わりやすく不安定な資本と調和させることを可能にするのである。しばしばそれは、賃金の支払いを遅延させるという方法、または賃金の不十分な支払いやインドにいる家族が行う出資をかもにするような行いを通してなされる。シアンの本は、諸々のグローバルなプロセス、そしてそれらのプロセスが「ローカル」な変容へと連結することに関して現在なされている議論への非常に重要な貢献である。とりわけ、それはエスニシティの形成やトランスナショナル化のような概念に対して新しい見通しを切り開くものである。しかしながら、ここで私たちにとって関心があることは、もっと的を絞ったポイントである。つまり、それは私たちを空間的な境界から「時間的」な境界という問いへと移動させてくれるようなポイン

トである。

ボディショップ・システムが機能するために、労働力を提供する会社は、労働者が移動する国の権能の内部で、様々な独自のメカニズムや法の抜け穴を動員・利用する必要がある。これが、オーストラリアのシドニーでシアンによってなされたフィールドワークの関心事である。熟練労働者の入国を可能とする長期就労ビザ（サブクラス 457）は、雇用者から身元保証の後援、つまりはスポンサーを受けるよう求めるが、ボディショップがそのスポンサーを引き受けることを認めていた。またたとえスポンサー制度の下では認められてなかったとしても、ボディショップが柔軟な条件で、労働者を産業界や政府に貸し出せるようにしていたのである。こうした実践の分析から、シアンはIT産業における労働の受容と供給の論理が変化していることに関して概括的なポイントを指摘する。

IT労働の受容と供給との間に現実のギャップがあるかどうかということは、それほど重要なことではない。もっと重要なことは、発展期にある勢いを維持するために、労働供給をよりいっそう拡大しようと望む雇用者の欲望である。供給が増大するほど不足が増大するようになるにつれて、現実の不足とは違い、このようなヴァーチャルな不足は決して釣り合いが取られることはなくなっていく。ゆえに、熟練労働力が不足することと専門職の失業者がかなりの数にのぼることとの共存こそが、ニューエコノミーの長期的な特徴でありうるのだ。それは、たとえば多くの労働者が求められているまさにその最中でさえ、労働者をボディショップという「ベンチに控えさせておく benching」という決まりきった実践に典型的に表れている（Xiang 2007: 17）。

ここで言及された「ベンチに控えさせる」という実践は、民間企業や公営企業へと委託するために、ボディショップの労働者を蓄えておくことを必然的に伴うことになる。その間、労働者には非常に少額の賃金しか支払われない。このベンチに控えさせるシステムとそこに含意された「ヴァーチャルな供給の不足」を創出させることは、需要に対してIT労働者の供給のタイミングを合わせてペースを定めるための技術として理解できる。ベンチに控えている労働者の観点からすれば、これは宙ぶらりんの時間である。そのときには、かれらが犠牲を払って獲得した知的な技能が浪費されているだけでなく、かれらがそれと同時にタクシーの運転者やショップ店

員のような非熟練労働を行うにつれて、その技能は途絶えることなく更新されるのである。ここで再び、私たちは労働の多数化が作動していることに気づく。非熟練労働から熟練労働を区別する分割は、これらの仕事が1人の人間によって行われるときに崩壊する。より正確には、私たちはこう言える。熟練労働と非熟練労働というまさにその分類方法自体を、需要と供給、失業とインフレとの間の釣り合い、国内総生産、移民のプッシュ要因とプル要因などの伝統的な閉じられたシステムを上回る動的な時間の枠組みの中で再考する必要があるのだ。

資本主義とグローバル化に関する研究におけるいわゆる空間論的転回はたいいてい、トランスナショナルなわたちの移動、コンフリクト、遮断、流れの停止といった時間的な次元に十分に注意を注ぐ方向へと進んでこなかった。私たちはこの点に関して、デヴィッド・ハーヴェイ、ドリーン・マッシー、ネーデル・スミスのような思想家たちによってなされた評価すべき功績や洞察を否定したいわけではない。そうではなく、グローバルなモビリティと流れの停止が、多様な空間的・領域的の配置の中へと主体が形成される過程を入り込ませているときには、私たちが光を当てたいと欲する時間をめぐる動態によって、コンフリクトの過程に関するより卓越した見解が提供されうるといことなのである。そこで、ヨーロッパの境界地帯における拘禁センターを例にとってみよう。空間という見通しからすれば、これらの拘禁センターは戦略的に位置づけられることになる。というのは、それらは境界を確立し補強する手段となる役割を有するからである。拘禁センターは、ヨーロッパの領域へ来る移民、そしてヨーロッパの領域から出て行く移民の移動を選別しふるいにかけるべく諸々の国家やEUによって展開されている境界管理技術の一部を形成しているのである。しかしながら、もし私たちが時間の次元に光を当てるなら、地理を管理するこの要素を、拘禁・乗り継ぎ・延長・加速という数多の非同時的なリズムを考慮して再考しなければならないだろう。それらのリズムは、動いている身体と精神の主体的レベルの経験を横断するのみならず、労働市場の動態と市民権の社会的・象徴的な骨組みのなかへとこの動きを刻み付けるための重要ポイントでもあるのだ。

こうしたことは、「乗り継ぎ移民 Transit Migration」として知られるトランスナショナルな研究者集団によって例証されてきた。この研究者集団は、たとえばエーゲ海地域で拘禁されている移民たちの数々の主体的な経験を強調してきた。エーゲ

海地域では、拘禁センターがヨーロッパ空間の出口としてよりも、入りのポイントとしての役割を果たしているのである。パナジオティディスとツィアノス (Panagiotidis and Tsianos 2007: 82) が述べているように、「移民の移動を統治しようとするねらいが目標とするのは、統治不可能なフローから統治可能な移動する主体を生産するために、一時滞在地帯へと移動の動力を押し込めてしまうことなのである。一時滞在地帯というのは、モビリティに階層化をもたらすものなのである」。アンドリヤセビッチ (Andrijasevic 2008) は、「この手法は通例、移民の旅路が描かれる方法としての前進的な直線性（たとえば、A から B までへの移動、出身国から目的とする国までの移動のような）を断ち切るものであり、待機・潜伏・予想外の回り道・定住・途中下車・逃走・帰還のような中断や非連続性に対して注意を喚起させるのである」と説明している。EU の南側の近隣諸国にある収容所について記述するなかでアンドリヤセビッチは、収容所のねらいが移民の移動を全体として妨害し遮断することではなく、移民の時間と速さを調整することにあると強く主張している。まさしくここから、「時間的境界」という概念を展開できるのだ。時間的境界は空間的境界とは同一のものではなくて、むしろそれに再度形を与えて、強化し、そして緩和する役割を果たすのである。

行政拘禁システムと労働市場の形成との間のつながりを概念化するひとつの方法は、拘禁センターを「減圧室 decomposition chamber」(Mezzadra and Neilson 2003) として記述することである。「減圧室」は、もっとも暴力的なやり方で、諸々の労働市場の実在自体をその根本において構成している緊張を均衡させるのに役立っている。この観点からすれば、シアン・ピャオによって述べられたベンチに控えさせるという実践は、たとえ暴力的な閉じ込めを伴っていないとしても、拘禁のある独特の形態と考えることができる。まさしく問題は、特有の法的枠組み（この場合は、熟練労働者の移民への雇用者による身元保証のためのビザ、長期就労ビザ（サブクラス 457）のこと）の内部で、雇用に対して、そして搾取に対して影響力を発揮することになるベンチに控えさせるという実践なのだ。このような境界設定は、明らかに労働市場の内部の分割を伴う（たとえば、オーストラリアの国内労働市場のなかで、正規雇用の IT 労働者から、シアンによって調査されたようなボディショップの労働者を区別する）一方で、はっきりとした労働の多数化もまた伴う（それ

は私たちがボディ・ショッピングという実践が有するグローバルな次元をきっちりと考慮するときに明らかとなる——これらの労働者が織りなす関係は、インドにいる親族、アメリカにいるよく似た IT 労働者、シンガポールやクアラルンプールのような場所にいる仲介者などにまで及んでいる）。拘禁センターの経験を通して、私たちはベンチに控えさせるという実践における何がしかを理解できるのである。しかし、また逆のことも当てはまるのである。ベンチに控えさせるという実践を参照してみれば、拘禁センターは、労働力と名付けられた独特の商品を生産し再生産することと非常に大きな関係を有しているようにみえるのである。「剥き出しの生」に対する主権権力の行使 (Agamben 1998 [2003]) との関係よりも、拘禁センターは、労働力という商品の生産と再生産とより大きな関係を有しているようなのだ。それゆえに、私たちが労働の多数化と呼んでいる手法は、フォーコーによって導入された主権と統治性という 2 つのカテゴリーが構成する時間的・空間的な関係を再考するよう求めるのと同様に、これら 2 つの概念を分割することについても再考を求めることになる。

重要なことは、主権と統治性の概念のどちらをとるかということではなく、現代の権力関係やそれに付随する主体形成の動態を十分に分析するあらゆる試みはその双方を作動させ続けておくということなのだ。権力が行使される際のこれらの形態あるいは戦略を理解するための鍵は、現代のグローバルな秩序のなかで、諸々の境界が単に排除の手段としてではなく、差異を通しての包摂、つまりは示差的包摂の技術としてどのように作用しているのかを分析することである。この見通しのなかでは、境界を強化する手段や実践こそが、境界の横断が可能となり、そして実際に実践され経験される際の諸々の条件を形作っていることになるのだ。「ヨーロッパ要塞 Fortress Europe」のようなメタファーは、労働力のモビリティを選択的にふるいにかけていくという作業が、ヨーロッパ、そしてその数々の構成国の経済の持続可能性にとって、とりわけ年金システムの維持にとってもつ決定的な重要性の程度を過小評価している。次のことを認める必要がある。エティエンヌ・バリバル (Balibar 2004 [2008]) が記しているように、境界はもはや「領土の縁にあって、領土が存在しなくなる地点を示す」のではなく、「政治空間の真ん中に身を置いてきた」(109 [211]) のである。

4 節合と等価性を越えて翻訳について再考する

労働の多数化という概念によって、個々の国民国家のなかでの不平等、貧困、福祉などいつもの関心の向こう側へ進むことで、私たちは社会的包摂をめぐる現在の議論を再考できる。この見通しのなかでは、包摂とは明確な社会的善ではなく、階層化と管理の手段として機能するふるいかけと差異化のシステムなのである。問題となるのは、「社会とは排除の行為を通して自らを定義している」というおなじみの議論を乗り越える方法で、社会の政治的構成について考える方法である。この議論には数多くの異説があるが、近年のもっとも洗練された説の1つを、エルネスト・ラクラウ (Laclau 2005) のポピュリズムについての仕事のなかに見いだすことができる。彼にとって、このような排除は「次の2つの間で、アイデンティティが引き裂かれることを前提としている。一方は、あらゆるアイデンティティが分割されるということ、つまりアイデンティティを諸々の他のアイデンティティとつなぎあわせたり、それらのアイデンティティから引き離したりという示差的性格のこと。他方は、排除された要素に対峙する他のすべてのアイデンティティとの等価的な結合のこと。この2つの間でアイデンティティは引き裂かれる」(78)。排除された要素がポピュリスト運動へと生成するためには、「あらゆる特殊な要素が等価に共有しているものを強調すること」(78)で、その要素を組成している特殊性を「部分的に放棄すること」を引き受けなければならない。しかし、等価性の連鎖に沿って様々な特殊性がつなぎあわされるにつれて、「人民 people のアイデンティティが空虚なシニフィアンとして機能する」(96)地点に達するまでに、それらの特殊性の意味は弱められてしまうのである。したがって、ポピュリスト運動は、社会のなかに内的フロンティア *internal frontier* を確立しながらもそうすることで、共同体の全体を代表するものとして機能することを欲する部分性」(81)へと生成することになるのである。

このような内的フロンティアは、私たちがバリアルにしたがって、「内的境界 *internal border*」と呼ぶものとは非常に異なっている。何より、ラクラウは人民をポピュリスト的アイデンティフィケーションの結果として構成されるものと理解している。このアイデンティフィケーションは、既存の支配権力に挑戦するのであるが、それはいつも既存の境界の内部においてなのである。これらの境界が政治的領域の間のものであろうと、既存の制度の

間のものであろうと、そうなのである。ラクラウの共著者であったシャンタル・ムフが述べるように (Mouffe 2005 [2008])、「排除なくして合意はなく、「彼ら」なくして「われわれ」はなく、境界線(筆者訳注: *frontier* のこと)を引くことなしにはいかなる政治もありえない」(73 [111])。これらの思想家たちは、社会的実践や闘争を政治的節合という概念との関係で組み立てている。こうしたやり方は、これらの実践や闘争が単に特殊なものであるという模範を繰り返すだけであるし、それゆえに諸々の国民国家と国際関係が形成する既存の制度構造の外部で、新しい政治のかたちを生み出すことはできない。節合は、こうした特殊性が等価性という模型のなかへ捉えられる契機として機能する。等価性が疑問に曝されることはないし、たいていは際限なく増殖することになる。おまけに、この等価性の論理が、政治的異議が実現されうる共通のもの *the common* の地平自体となる。

労働の多数化という見通しからすれば、強調されるべきことは、等価性の連鎖に沿った意味の増殖ではなく、既存の数々の政治空間を切り分け、それらを越えていく境界の増殖である。ここから導き出されるのが、示差的包摂なのである。それは、排除を通して政治的なものを構成することとはほど遠いものであり、包摂する際の選別の過程を必然的に含むものである。示差的包摂は、あらゆる政治的なものの全体化が偶発的なものであり、異議申し立ての過程に服するものであることを提起する。実際、私たちは境界を激しい物質的なコンフリクトの場としてみなしている。そこでは、生と死、分割と連結、横断と妨害のすべてが伴っているのだ。したがって、共通のものを構築することは、空虚なポピュリズムの名の下にすべての差異に関する主張を弱めてしまう等価性の論理における差異の働きとは何の関係もない。私たちの観点からすれば、人民とは既存の政治のかたちもたらす構成された主体以外の何ものでもありえないし、境界の横断や乗り継ぎする主体の生産のなかでは異議を申し立てられるような構築物にすぎないのである。

乗り継ぎする様々な移民や主体の非常に異質な経験や労働市場内の位置取りの間で、安易な同盟や連帯を想像し夢想することが問題なのではない。むしろ、労働の多数化をめぐる諸々の過程が具現化されたものとしてこうした形姿をみなすということは、労働市場のなかへかれらが差し込まれることでもたらされるある種の共通性に光を当てるということなのである。こうした労働市場は、もはや労働力の生

産と再生産の連続性や安定性を所与とはできない。このような主体の間で相互連結が生じるのは、すべての差異を等価性のなかへと瓦解させてしまう節合を通してなのではない。そうではなく、それは翻訳という過程を通してなのだ。翻訳とは、酒井直樹が述べるように (Sakai 1997 [2007]), 「二つの十全に形成された、異なっているけれども比較可能な言語共同体の間の伝達の形態」(15 [28]) としては理解できないものである。翻訳の概念を練り上げることは、諸々の異質な価値を貨幣という一般的等価物へと不断に平衡させることで作用する資本の構造自体を下支えする交換の論理に疑問を投げかけることなのだ。等価性や中立的な仲立ちといった枠組みの外部で翻訳について再考することで、次のことが識別できるようになる。つまり、政治的には不利益をもたらしてしまうような数々の勢力や同盟の分散状況へと帰結することになる意味の多数化と増殖の数多のパターンを識別できるようになるということである。それとは逆に、翻訳に対するこのような異言語的なアプローチ *heterolingual approach* には、政治思想や行動を一連のてらめな節合の中へと還元してしまうことは含意されていない。節合はそれでもなお既存の制度的布置に束縛されているのだ。

この翻訳の枠組みの中で政治的なものを再度理解することによって、そのコンフリクトの次元を覆い隠したいわけでもないし、破棄したいわけでもない。闘争の実践と経験は、すべての言語を一樣な領野へと平らにしようとはしない翻訳の実践と通約している。しかしながら、このような翻訳は、次のことを問うよう私たちを導く。それは、勝つか負けるのかの闘争の政治が、たいていは何かを勝ち取ると同時に何かを喪失することになる翻訳の政治に沿うかたちでどのように思考できるのかということである。必要とされていることは、これら2つの契機とそれらがもちうる様々な時間性の双方を考慮に入れた政治的なものであり、それらを改めて方向付けるということである。問題となっているのは、反乱や中断を強調する出来事の政治でもなければ、いかに偶発的な社会的布置が戦略的で限られたかたちの異議への可能性を提供するのかを強調する節合の政治でもないのだ。共通のものを構築するあらゆる試みにとって、闘争と翻訳は必要不可欠な仕事である。私たちはこの双方に同時に光を当てることによって、次のことを例証したいと願っている。それは、政治的なものの新しい概念を作り上げようとするあらゆる試みが、どれほどまでに労働の多数化と境界の増殖について考慮しなければならないのかという

ことである。

注

この研究成果は、一冊の本として公表される予定である。

文献

- Agamben, G. 1998, *Homo Sacer: Sovereign Power and Bare Life*. Stanford, CA: Stanford University Press. [アガンベン (高桑和巳訳) 『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』以文社, 2003年]
- Andrijasevic, R. 2008, "From Exception to Excess: Detention and Deportations in Contemporary Europe", forthcoming in *Deported: Removal and the Regulation of Human Mobility*, Eds. Nicholas de Genova and Nathalie Peutz.
- Balibar, E. 2004, *We, the People of Europe? Reflections on Transnational Citizenship*, Princeton & Oxford: Princeton University Press. [バリバル (松葉祥一・亀井大輔訳) 『ヨーロッパ市民とは誰か——境界・国家・民衆』平凡社, 2007年]
- De Genova, N.P. 2008, "The Deportation Regime: Sovereignty, Space, and the Freedom of Movement", forthcoming in *Deported: Removal and the Regulation of Human Mobility*, Eds. Nicholas de Genova and Nathalie Peutz.
- Ferguson, J. 2006, *Global Shadows. Africa in the Neoliberal World Order*, Durham, NC - London: Duke University Press.
- Froebel, F. - Heinrichs, J. - Krey, O. 1980, *The New International Division of Labor*, Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Hardt, M. - Negri, A. 2000, *Empire*, Cambridge, Mass., Harvard University Press. [ネグリ・ハート (水嶋一憲・酒井隆史・浜 邦彦・吉田俊実訳) 『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社, 2003年]
- Laclau, E. 2005, *On Populist Reason*, London: Verso.
- Mezzadra, S. - Neilson, B. 2003, "Né qui, né altrove — Migration, Detention, Desertion: A Dialogue", in *Borderlands, e-journal*, 2, 1 (<http://www.borderlandsejournal.adelaide.edu.au/issues/vol2no1.html>)
- Mezzadra, S. 2007, "Living in Transition. Toward a Heterolingual Theory of the Multitude", in *transversal* 06 2007, <http://eicpc.net/transversal/1107/mezzadra/en>.
- Mignolo, W. 2000, *Local Histories/Global Designs. Coloniality, Subaltern Knowledges, and Border Thinking*,

- Princeton, Princeton university press, 2000.
- Mouffe, C. 2005, *On the Political*, London – New York: Verso. [ムフ (酒井隆史監訳・篠原雅武訳) 『政治的なものについて——闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』明石書店, 2008年]
- Panagiotidis, E. – Tsianos, V. 2007, “Denaturalizing ‘camps’: Überwachen und Entschleunigen in der Schengener Ägäis-Zone”, in Transit Migration Forschungsgruppe (ed), *Turbulente Ränder. Neue Perspektiven auf Migration an den Grenzen Europas*, Bielefeld: Transcript Verlag: 57-85.
- Rajaram, P.K. – Grundy-Warr, C. (eds) 2007, *Borderscapes. Hidden Geographies and Politics at Territory’s Edge*, Minneapolis – London, University of Minnesota Press.
- Rigo, E. 2007, *Europa di confine. Trasformazioni della cittadinanza nell’Unione allargata*, Roma, Meltemi.
- Sakai, N. 1997, *Translation and Subjectivity. On “Japan” and Cultural Nationalism*, Minneapolis – London: University of Minnesota Press. [酒井直樹 『日本思想という問題——翻訳と主体』岩波書店 (岩波モダンクラシックス), 2007年]
- Sassen, S. 2006, *Territory, Authority, Rights. From Medieval to Global Assemblages*, Princeton – Oxford: Princeton University Press.
- Tsing, A.L. 2005, *Friction. An Ethnography of Global Connection*, Princeton, NJ – Oxford: Princeton University Press.
- Viner, J. 1951, *International Economics*, Glencoe, Ill.: Free Press.
- Wang, Hui. 2003, *China’s New Order: Society, Politics and Economy in Transition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Xiang, B. 2007, *Global “Body Shopping”. An Indian Labor Regime in the Information Technology Industry*, Princeton, NJ: Princeton University Press.

付記

翻訳を快諾してくれたサンドロ・メツツァードラ (Sandro Mezzadra), eipcp (European institute for progressive cultural policies) のライムンド・ミンチバウアー (Raimund Minichbauer) に感謝する。ここで訳出した論文は、eipcp のホームページに掲載されている。アドレスは次の通り。
<http://eipcp.net/transversal/0608/mezzadraneilson/en>